

日本でつくる 剣道具

— 剣道具の製造工程、すべて見せます

撮影=窪田正仁

案内人
川辺尚彦

(株)全日本武道具、
(株)日本剣道具製作所代表取締役

埼玉県羽生市の竹村産業株式会社で、いよいよ藍染めの工場へ。いくつにも区画された甕があり、藍色の液体が満たされている。表面は固まりが浮いたような状態で、棒でかき混ぜると白い泡が立ち液体が茶色に変化する。「藍玉をこの中で発酵させるわけです。毎日こーやってかき回して、ここに白い泡が出るんですが、それを見ているんです」

代表取締役の竹村恵司さんが説明してくれました。

「専門的に言うと還元させるわけです。この染料は還元させないと染まらないので、還元させるために発酵させます。毎日泡を見えますが、それは要するにpH(ペーハー)の管理だから、見ただけでは分からないので、舐めてみるんです。舐めてみることでほしいのところは分かります」

pHとは酸性・アルカリ性の程度のことである。自分で舐めてみる勇気はなく、どんな

味なのか聞いてみると、pHが適正なものは「ピリッと来るんです」と竹村さんは言う。

pHを整えるためには石灰を加え、発酵を促すために麩(小麦の皮)を入れる。

「中に入るのは菌なので栄養源が必要です。麩がブドウ糖に変わって栄養源となるんです」

このようにして藍玉を発酵させること10日間ほどで、染められる状態になるそうだ。染めていると菌が疲れてくるので、また麩を加えて栄養を与えながら続けるという。

藍玉を発酵させた液体に
何度も漬けて濃い色を出す

藍染めは糸の段階で染める「糸染め」と、布にしてから染める「後染め」の二通りがあるが、武州では全体の七割が糸染めである。一般に剣道着や袴は糸染めで、型染めは模様のあるオリジナルなデザインでバッグや袋などをつくる場合に用いられる。

糸を染める工程は機械化されている。いくつもの糸の束を機械にセットしてゆっくりと



下げていき甕の中に浸ける。引き上げると浸かった部分は藍色に染まっているが、上になつていた部分は白いままなので、そこが浸かるように回転させてまた浸ける。再び上がってくると糸をねじるように機械が回転して液体を絞り出す。

「こーやって何回も浸けて濃度を上げていくわけです。昔はこの機械がなく手で絞っていました。この機械をたくさん設置すれば生産力はずっと上がりますが、今度は色が揃わなくなってくるので、不良品が多くなります」

甕が区分けされていていくつも並んでいるのは、それぞれ濃度が違ってきているのだという。それを使い分けるのだが、基本的には濃いものをつくるには浸ける回数を増やす。それだけ手間がかかるということになる。

前回触れたように武士が「褐色」(かちいろ)を好んだという伝統を受け継いだものか、剣道着も色の濃いもの、あるいは色落ちしないものが好まれる傾向がある。

「剣道具メーカーからもそういう要望が出ま



竹村さんは藍玉を発酵された染料のpHが適正かどうか、舐めてみることで分かるという



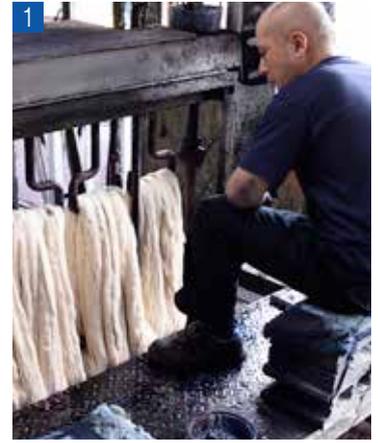
染料は菌なので栄養が必要。麩を加えるとブドウ糖に変化して栄養素となる



5 全体が藍色になって上がってきた



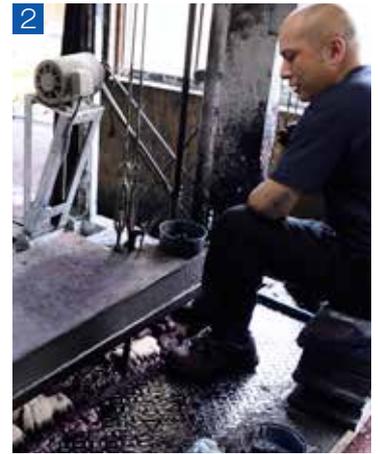
3 上がってきたところ。一番上の部分は浸かり切っていないので白いまだ



1 白い糸の束を機械に掛けると、下がっていつて染料の中に入っていく



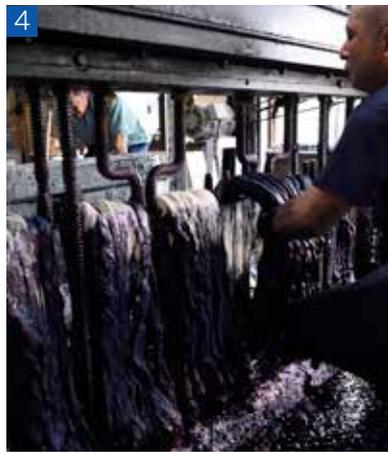
6 機械でねじるようにして染料を絞り出す



2 一番下まで下りて糸が浸かった状態



7 絞り切った状態。ここまでの作業を繰り返して染めていくのである



4 糸の束を回転させるように掛け直しもう一度浸ける



8 染められた糸。これを天日で、天気が悪いときは乾燥機を使って乾燥させる

す。私は色が落ちて色合いの良さが出てくるからこそ藍染めではないかと思うのですが、現代は藍染めとはそういうものだと分らないから、色が落ちないものが欲しいと考える人が多いですね」と
と川辺さんが言うと、
「それは一番の課題ですよ。これまでも業者さんからもっと色が落ちない藍染めができないものかという要望はいただきました。でも色落ちしないためには染め方を変えるとか違った方向にいかないと無理なんです」と竹村さん。竹村産業でも、以前は藍染めのバッグ、シャツ、ネクタイ、民芸品などを

手がけていた。そういったものは藍が肌についていたりするとクレームが来るので何度も洗って出荷していた。当然色は浅くなる。「武州正藍染」のカタログを見ても、普通の感覚では水色に近いようなものも多い。連載の中で後述するが、剣道着も洗って出荷することが一つの解決策にはなっているが、色落ちせず同時に非常に濃い色が求められているという難しさがある。
染め上がった糸は、庭で自然乾燥させる。取材日は天気が悪かったので乾燥機を使っていて見られなかったが、藍に染まった糸が庭いっばいに広がる光景は絵になるという。